の若い學者――主としてドイツの學者――が人間の研究を始め、我々人間が下等動物から進化した事を各方面から證明した。此間沈默を守つて居たダーウヰンは一八七一年に今云ふた人類降下論を出版して各方面から人間の進化を證明した。其結論に、勇敢なバブーンの牡が怒り猛る群犬の眞中に躍り込み一頭の子ザルを奪ひ助けた事(ブレームの實驗談)や、一頭の小ザルが畜養人を助ける爲めに自分を犧牲にした事實を述べた後、ダーウヰンは『自分としては敵を苦しめて悅んだり、血祭りをしたり、悔ゆる事もなく子供を殺したり、自分の妻を奴隷扱ひにして苦しめたりして、無論禮儀作法も知らず、最も愚かな迷信を有つ蠻人の血が自分の身體に流れて居ると思ふより、之れ等サルが自分の先祖であると考へる方が遙かに氣持が好いではないか』と云うて居る。

併しハックスレー、ヘッケル又はダーウヰンが論じた時分から見ると、今日は一方には我々人間の研究も大層進歩したし、又他の方面には高等サルの研究も非常に進歩したので、チンパンヂイやゴルリラの樣な類人猿と我々人間とは最も近い緣類である事は、最早や決して疑ふ事

の出來ない事實となつたのである。之れが我々に取つては最も肝要な事柄で、夫れが又學問の上から計りでなく、總て人生に大關係を有するからである。例へば今述べた變異と遺傳も人間が動物と同じものであるから、動物で行つて知れた事實を直接人間に應用する事が出來るのである。又疾病の如きものも我々人間で試驗の出來ないものは動物で之れを施した後人間に應用する事も出來るのである。之れ等の內には類人猴と人間丈けを冒す病毒もある。之れ等も人間と高等猿類が同一であるか又は甚だ近い事を證明するものである。其他斯樣な事を數へ來らば夫れは實に多く、何れも皆動物と人間と同じものであるから之れ等の事が役立つのである。又近頃八釜しい優生運動の如きも人間が生物であればこそ、總ての生物が支配される自然の法則が又人間を支配するから、之れを利用して人種の改良も行はるれば又惡いものの種を減じ又は滅亡させ、善良なものを增す事も出來るのである。

之れ等の事のみでなく、我々人間はハックスレーが云ふ如く、誰れ彼れの別なく、此世界に生れて來たものは、我々が何處から來たか、我々の先祖は如何、我々の將來は如何等の問題は

總て他の問題を超越した問題で誰れもかも最大の興味を以て迎ふべきものである。

では如何なる點で人間が類人猿に一番近いと云ふ事が證明されたかと云ふと人間とサルの化石が其一つである。人猿の化石で最も有名なものは前述ピテカントロープスであるが、夫れより前にドイツから出たるネアンデルタールと云ふものがあつた。其の出た當時（一八五六年）シャーフハウゼンは之れを古代の人間の骨であると云ひ、ハックスレーも此說に贊成し、前述「自然に於ける人類の位置」に於て大いに之れを論じて居る。夫れからライエルもシュワルベもヘッケルも之れを甚だ大切なものであると見て居たが、ただフヰルヒョオは夫れが低腦者の頭骨で決して人間の先祖に近いものでないと云うて居たのである。處が此のネアンデルタール型の人骨は其後歐洲では諸方から出て來て、一時此種の人間が歐洲全土に居たものである事が證明された。夫れから後今云うたジャワの人猿が發見せられ、一九〇〇年の始めになつてハイデルベルグ人が發見せられ、英國にも南亞非利加にもと云ふ樣に諸方に發達の度を異にした人骨が發見せられたが、又一方には高等サルの化石も發見さるるに至り、今日ではジャワの人猿か

ら今日の人間に至る迄の中間物は殆んど見付けられたのである。

であるからピテカントロプスから今日の人間迄は分つたが、夫れから前の處が疑問になつて居た。ピテカントロプスは何れのものに最も近いか、之れが面白い問題であつたが、近い頃になつてハンス・ワイネルトが、類人猿の頭骨を調べた處、チンパンヂィの頭骨には前額の下に前額腔と云ふ腔處があつて、之れが、同じ類人猿のオラング・ウウタンにもなければギボンにもないし、其外の廣鼻類にもない處が此腔處がピテカントロープスにあるし、ネアンデルタール人にも現今の歐洲人にもある。夫れ計りでなく、此腔處はチンパンヂィで一番大きく、ピテカントロープスが其次ぎで、ネアンデルタール、現今人と云ふ樣に段々小さくなつて行くが、現人間には幾等小さくても夫れが無い事はないと。するとチンパンヂィは此前額腔では人間の仲間に入るべきもので、他の類人猿とは違つたものである。此の事實と共にワイネルトは又腦の前後の長さと頭骨の外面の長さとを計つて之れを百分の比例にした處、之れも亦前額腔で得た結果と同一である事を發見した。此結果はゴルリラでは七五でチンパンヂィで八一、ピテカント

ロープスで八四、ネアンデルタールが八六で、現今の人間では九二であると。之れ等の差を見るとゴルリラとチンパンヂイとの間が六で、チンパンヂイとピテカントロープスが三、ピテカントロープスとネアンデルタールが三で、ネアンデルタールと現今人との差が六である。

夫れから之れ等より一層注意を要する事は人間と類人猴との血緣で、澤山の人が血清を調べた處類人猴とされて居るものの内でもオラングウウタンの血清は餘程違つて居るのにチンパンヂイと人間の血清は殆んど區別が出來ない程能く似て居ると。であると、今日の動物學者が類人猴としてゴルリラ、チンパンヂイと、オラングウウタンとを一緒にして居るが、チンパンヂイ（ゴルリラはチンパンヂイに近いものであるが、此サルの研究はまだ完全に出來て居ない）は之れ等のものから分けて、人間の仲間に入れた方が穩當ではあるまいか。さうであれば太閤樣もサルに似たと云はれても別に氣持を悪くする事はあるまい。

又他の方面には近頃ドイツのケーラー博士や米國のヤークス博士は大いにチンパンヂイの精神的の研究をして居るが、彼れ等にも仁義禮智信と云ふ樣な人間としても最も尊い性格を供へ

て居るものがある事が解つて來た。人間にも自分の位置を利用して泥棒をしたり、尊い勳章を賣つて金儲をする樣な奴がある世の中で前述ダーウヰンが云ふサルの如きは實に見上げたものであるではないか。サルが人間の先祖である事を大層嫌がつたブライアンも之れ等悪人を知つたらば地下で苦笑して居るであらう。

であるならば何故にサルが人間と同樣利口にならないか。之れは全くサルに言語がないからである。言語がないから教育（最も廣い意味で云ふ）がないのである。であるから、彼れ等には我々人間で見る樣な社會がないし、從つて又社會遺傳とも云ふべきものが缺けて居るからである。

であるから我々が使用する言語も耳から入つて解る樣なものでなくてはならないし、又文字も夫れを現はすものでなくてはならない。今日本邦で使つて居る樣な象形文字や夫れから造つた片輪のカナ文字杯は一日も早く廢すべきものである。斯樣な事をして居ると餘り遠くない將來には今日のチンパンヂイが人間と違ふ位、象形文字を使ふ邦人と聲音文字を使ふ人達と違ふ

樣になるであらう。何んと恐るべき事ではあるまいか。（終）

昭和五年九月十日印刷
昭和五年九月廿六日發行

定價金五拾錢

著作者　石川千代松
發行者　神田豐穗　東京市日本橋區吳服橋二丁目五番地
印刷者　小島爲吉　東京市小石川區初音町八番地
印刷所　春秋社印刷部

發行所　東京市日本橋區吳服橋二ノ五
株式會社　春秋社
電話日本橋(24)二一六六九番　二一六七一番
巷東京二四八六一番

春秋文庫

一つ五拾錢

1 永井潛著 科學的生命觀 *
2 出井盛之著 經濟學說史 *
3 久保良英著 輓近の心理學 *
4 瀧本誠一著 日本經濟學史 *
5 宮島新三郎著 文藝批評史 *
6 阿部重孝著 教育學 *
7 入澤宗壽著 教育史 *
8 高野辰之著 民謠・童謠論 *
9 住谷悅治著 社會主義經濟思想史 *
10 美濃部達吉著 選擧法概說 *
11 石川千代松著 進化論 *
12 深作安文著 倫理學概說 *
13 萩原井泉水著 俳句趣味論 *
14 五來欣造著 政治哲學 *
15 賀川豐彦著 宗教教育の本質 *
16 ヤッシング著 藤野滋譯 ヘンリ・ライクロフトの手記 *
17 デ・クエンシイ著 辻潤譯 阿片溺愛者の告白 *
18 ヘッケル著 內山賢二譯 宇宙の謎 *
19 上野松峯著 漂泊の人西行 *
20 青野季吉著 社會思想と中產階級 *
21 田邊尙雄著 東洋音樂論 *
22 ウインデルバンド著 吹田順助譯 十九世紀獨逸思想史 *
23 瀧本誠一著 日本貨幣史 *
24 野口米次郎著 芭蕉論 *
25 高城仙次郎著 增補物價問題研究 *
26 野口米次郎著 芭蕉俳句選評 *
27 外山卯三郎著 現代美術論集 *
28 板垣鷹穗著 伊太利亞美術史 *
29 小酒井光次著 實驗遺傳學概說 *
30 W、スマアト著 加田哲二譯 經濟價値概論 *
31 暉峻義等著 產兒調節論 *
32 岡邦雄著 自然科學史 *
33 杉田直樹著 醫學と現代生活 *
34 山邊習學著 佛敎と日本文化 *
35 小林良正著 經濟史論考 *
36 黑岩涙香著 天人論 *
37 黑岩涙香著 小野小町論 *
38 萩原井泉水著 俳壇傾向論 *
39 （近刊）
40 （近刊）

—以下續々刊行—

338
440

終